

日本がん分子疫学研究会 ニュースレター

2009年10月
Vol.10, No.1
事務局：〒466-8550
名古屋市昭和区鶴舞町65
名古屋大学大学院医学
系研究科予防医学／
医学推計・判断学内
TEL：052-744-2132

「がん予防大会 2009 愛知」を振り返って

第10回日本がん分子疫学研究会 会長 菊地正悟（愛知医科大学医学部公衆衛生学）

第10回日本がん分子疫学研究会は、第32回日本がん疫学研究会（田島和雄会長）、第16回日本がん予防学会（白井智之会長）との共催による「がん予防大会 2009 愛知」として、6月16～17日の2日間、愛知県がんセンター国際医学交流センターで開催されました。がんの予防研究に関連した日本の三学会・研究会の合同開催は、東

京、福岡に続いて第3回目になります。日本がん分子疫学研究会の会員は、遺伝子多型により修飾される環境要因の影響を評価する分子疫学的などがんの一次予防に役立つ研究や、早期診断、ハイリスクグループの抽出という二次予防に役立つ研究に取り組んでいます。日本がん疫学研究会の会員は、環境要因や宿主要因の影響を評価する疫学研究や、記述疫学の基本であり、がん対策の評価にも繋がる地域がん登録に関する研究、二次予防に役立つがん検診の効率化や効果評価の研究などに取り組んでいます。日本がん予防学会の会員は、がん予防に関する基礎的な研究、特に介入によってがんを予防する研究を、動物実験モデルなどを用いて行っています。これら三つの学会・研究会に所属する研究者が、相互の最新情報を提供しながら相互の意見を交換することが「がん予防大会」の目的です。今回で3回目となった「がん予防大会」では、がん分子疫学研究会とがん疫学研究会の合併が、それぞれの幹事会で検討され、本大会で

合同説明会が実施されるなど、「がん予防大会」という形が新たな動きを生んでいます。

このような流れの中で、大会の主題は「予防の容易ながん、困難ながん」としました。各部位のがんについては、慢性感染症や喫煙・飲酒習慣などリスク要因がわかっていて一次予防が可能かどうかや、早期発見・治療による救命という二次予防が可能かどうかがある程度わかっています。一次予防、二次予防のいずれかが可能ながんは予防が可能です。しかし、膵がんのように明らかなリスク要因が喫煙に限られて影響も相対危険度3.0以下と限定的ながんは一次予防が困難であり、二次予防も現状では難しいがんなので、予防が困難ながんであるといえます。このようながんについては、遺伝子多型や血清のマーカーのような新しい要因との関連を合わせて検討することで、一次予防、二次予防の可能性を研究することが今後の課題です。逆に、胃がんのように、胃がん検診による二次予防が可能であり、最近の知見でピロリ

CONTENTS

「がん予防大会 2009 愛知」を振り返って

菊地正悟 1

がん予防大会 2009 愛知に参加して

松尾恵太郎 3

日本がん疫学研究会との合併：その後の経緯

浜島信之 4

第10回幹事会議事録 5

事務局からのお知らせ 6

編集後記 6

菌の感染防止／除菌によって一次予防が可能であることがわかってきたがんについては、予防を総合的に考えて、最も効率的な対策を構築していくことが今後の課題です。このように、本大会の主題はそれぞれのがんの特性に合わせた予防対策を総合的に検討することがありました。本大会で、これらの課題についての検討はごく一部しかできなかったと思いますが、その第一歩になったことは確かです。

本大会には、アジア諸国や日本全国から約 250 名の参加がありました。特別講演では、エコネット近畿・副理事長の仲津英治氏（自然に学び、そして地球環境問題に取り組む）が、地球環境保全への具体的な取り組みについて紹介されました。招聘講演では北海道大

学教授の浅香正博先生（ピロリ菌関連胃がんの予防）が、ピロリ菌の除菌による胃がん予防の効果評価について、国立国際医療センター・肝炎・免疫研究センター長の溝上雅史先生（日本人に多い肝がんの原因と予防）が、C 型肝炎ウイルスの防疫対策による肝がん予防の効果評価についてこれまでの研究成果をわかりやすく講演されました。シンポジウムは、アジアのがんの特性と予防対策、動物発がんとの予防、遺伝子多型と家族性がんの 3 つを組み、アジアで増加しつつあるがんの予防対策、動物発がんモデルによる予防実験、遺伝子型による発がん感受性とその対策など、がんの原因、予防、対策の評価などに関する話題を多角的な視点から検討していただきました。ワークショップやポスター

セッションにおいても非常に活発な議論が繰り広げられました。

このように「がん予防大会 2009 愛知」を成功裏に開催できましたのも、会員の皆様のご協力とご支援のたまものであり、本大会の運営に当たりました準備委員一同と共に皆様に心より感謝いたします。

来年度は北海道大学の浅香正博会長と札幌医大の森満会長のもと、7 月 15～16 日に「がん予防大会 2010 札幌」が開催されます。

最後に、本大会の開催運営に当たりましては名古屋市立大学病理学教室、愛知県がんセンター研究所疫学・予防部、愛知医科大学公衆衛生学教室の多くのスタッフの方々による心強い手助けがありましたこと、本大会の世話人の一人としてここに深謝いたします。



がん予防大会 2009 愛知に参加して

愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 松尾恵太郎



2009年6月16～17日の日程でがん予防大会2009愛知が愛知県がんセンター国際交流センターで開催された。まずは事務局の一員として参加いただいた皆様に御礼申し上げます。本年のがん予防大会における演題から分子疫学研究に関するものを振り返ってご報告させていただきます。

まず初日の国際シンポジウムでは、各国から各種がんに対する遺伝子多型と環境要因の影響に関する報告が相次いだ。ベトナムからは、Dr. Ngoan が胃がんと CYP1A1 遺伝子多型ならびに食事要因の関連を報告した。タイからは、Dr. Sriamporn より大腸がんに対する MTHFR 遺伝子多型と排泄頻度の関連について報告があった。韓国より Dr. Kim DH が大腸がん、アルコール代謝関連酵素、MTHFR、PPAR- γ 遺伝子多型と各種生活習慣に関する関連を報告した。中国重慶からは Dr. Zhou により、TS を含む葉酸代謝酵素群を含めて多彩な報

告がなされた。日本からは筆者が世界における Whole genome scan を用いた研究の紹介を交えつつ、愛知県がんセンターにおける FGFR2 遺伝子多型と乳がんに関する結果を紹介した。アジア諸国からの報告においても、遺伝子多型と環境要因の交互作用に関して、かなり一貫した結果が認められていたことは、アジアにおけるがん予防を考える上で共通の視点を取り得ることを示す有意義なシンポジウムであった。

二日目のワークショップの口演発表では、九州大学の銀先生から ALDH2 遺伝子多型と生活習慣に関する報告では、飲酒者の先生方から活発な質疑がなされた。合同シンポジウムでは、「遺伝子多型と家族性がん」というトピックで様々な演題が発表された。石川秀樹先生からは家族性大腸腺腫症における APC 遺伝子変異の部位や、腺腫の発生状況に関する報告がなされた。放影研の林先生からは、被爆者集団における結腸直腸発がん感受性における IL-18 遺伝子に関する詳細な検査結果が報告された。中でも、被曝量と IL-18 の特定アレルとの間に交互作用が認められたとの報告は大腸がん発がんメカニズムへの示唆に富むものであった。愛知県がんセンターの尾瀬先生が、アルコール脱水素酵素遺伝子群の複数の多型と頭頸部・食道がんリスクに関して報告された。アジアにおいてはかなり大規模な

検討であり、欧米の研究との対比も含めて興味深いものであった。名古屋大学の菱田先生からはピロリ菌感染、胃粘膜萎縮、胃がんをエンドポイントとした遺伝子修復酵素、hOGG1、MUTYH、MTH1 多型に関する中間報告がなされた。岡山大学からは三田先生から MMP family 遺伝子より選ばれた 10 多型と非小細胞肺がんに関する結果が報告され、MMP9、MMP27 の多型群との関連が示された。

ポスター発表でも、数多くの分子疫学研究の成果の報告がなされた。遺伝子多型のみならず血清・血漿におけるバイオマーカーを用いた検討も報告されている。愛知医科大学の柳生先生からは、血清 TGF- β 1 レベルと胆管がん死亡に関する文部科学省コホート研究 (JACC study) 内でのコホート内症例対照研究の結果が紹介された。その他にも多くの分子疫学研究に関するポスター演題が発表されていた。

がん予防学会2009愛知の演題を分子疫学研究という側面から振り返りましたが、がん予防学会、がん疫学研究会、がん分子疫学研究会の各々の興味をうまくブレンドした演題が数多く出され、それに対する活発な議論がなされた良い会であったと感じております。

末筆ながら、がん分子疫学研究会並びに会員の皆様のますますの発展をお祈り申し上げます。

日本がん疫学研究会との合併：その後の経緯

日本がん分子疫学研究会 会長 浜島信之

前号（2009年3月号 Vol 9, No 2）に続き、本研究会と日本がん分子疫学研究会との合併についてのその後の経緯についてご報告します。

平成18年の第29回の研究会から、研究会としての性格を同じくする日本がん分子疫学研究会と日本がん疫学研究会が同時開催となり、同じ年に合併についての提案が幹事会で行われたことは前回ご説明したとおりです。この提案を受け、両研究会において連携協議会が設置され（本研究会の委員：北川先生、中地先生、湯浅先生、梶村先生、浜島、日本がん疫学研究会の委員：秋葉先生、菊地先生、田中先生、大島先生、田島先生）、本年5月15日には連携協議会が開かれました。それぞれの研究会で実施されたアンケート調査結果に基づき、合併に向けて協議が行われ、各幹事会でも検討が行われました。「がん予防大会2009愛知」6月16日には、両研究会の会員への合同説明会も行われました。

合同説明会で、1. 両研究会が対象とする研究分野は重複するところが大きく、合併すればそれぞれの研究会にとって多彩で有益な情報交換が行われ、がん疫学全体を包含する研究会になること、2. 当然ながら両研究会には会員の重複も多く、合併すれば会員を一元管理することができ、2つの事務局が作業をするという無駄を省くことができることを私からご説明

いたしました。これまでの両研究会の長所を発展させる工夫として、新規約の付則には「本研究会はがんを対象とした予防、医療、実態把握に疫学・分子疫学を応用する幅広い分野を対象とする。例えば、記述疫学、分析疫学、介入研究、がん登録、検診、分子疫学、発生機序、診断分類、発生要因、予防要因、予後要因、がん予防、患者QOL、がん対策、社会システム、およびこれらの分野と関連する研究分野が挙げられる。」と記載することが幹事会で提案されたことも合同説明会で報告致しました。

合併に際しては、1. 研究会の名称、2. 役員の名称（日本がん分子疫学研究会：会長、幹事、監事、学術委員長、日本がん疫学研究会：代表幹事、幹事、監事、会長）、3. 幹事の定年（日本がん分子疫学研究会：規定なし、日本がん疫学研究会：規定なし、ただし、60歳で推薦により特別会員に）、4. 会員の種類（日本がん分子疫学研究会：名誉会員、正会員、賛助会員（法人会員）、日本がん疫学研究会：一般会員、特別会員、顧問会員、賛助会員）、5. 事務局設置施設（日本がん分子疫学研究会：名古屋大学予防医学教室、日本がん疫学研究会：愛知県がんセンター研究所疫学予防部）、6. ホームページ管理（日本がん分子疫学研究会：愛知医科大学、日本がん疫学研究会：なし）、7. 年会費（日本がん分子疫学研究会：正会員

3,000円、学生会員1,000円、名誉会員 無料、法人会員10,000円、日本がん疫学研究会：一般会員/特別会員5,000円、顧問会員 無料、賛助会員1口50,000円）、8. 合併後の学術集会の開催回数（平成21年度は日本がん分子疫学研究会：第10回、日本がん疫学研究会：第32回）、9. ニュースレターの発行（日本がん分子疫学研究会：ニュースレター一年2回発行、日本がん疫学研究会：News Cast 年4回発行）、10. 学術集会の内容など、すり合わせが必要な事項があります。

新研究会の「学術集会の内容」につきましては、上記にあります「本研究会はがんを対象とした予防、医療、実態把握に疫学・分子疫学を応用する幅広い分野を対象とする・・・」を新規約の付則に明記することにより調整ができておりますし、その他の事務的な事項についても調整が可能だと思っています。また、新研究会の名称については更に両幹事会で検討を重ね、両研究会が了解できるものがないと考えています。これらの事項については両研究会の幹事会にて最終合意に達することができれば、来年7月の札幌での学術集会時の総会でそれぞれ承認を受け、合併できればよいと個人的には考えています。ご意見がございましたら日本がん分子疫学研究会事務局、もしくは私に直接お知らせいただければ幸いです。

第 10 回日本がん分子疫学研究会幹事会議事録要旨

平成21年6月16日(火)~17日(水)に名古屋市の愛知県がんセンターにて、第10回日本がん分子疫学研究会(菊地正悟会長)・第32回日本がん疫学研究会(田島和雄会長)・第16回日本がん予防学会(白井智之会長)による「がん予防大会2009 愛知」が開催された。16日に幹事会ならびに総会が開かれ、幹事会の議事内容は以下の通り。なお、幹事会での報告内容と決定事項はすべて総会でも承認された。

日時：平成21年6月16日(火)
8:30~9:20

場所：愛知県がんセンター国際医学交流センター視聴覚室

出席者(敬称略、以下氏名は50音順)：菊地正悟、古野純典、酒井敏行、清水憲二、末岡榮三朗、梶村春彦、田島和雄、中地敬、浜島信之、森満の10名。今井浩三、北川知行、笹月健彦、園田俊郎、津金昌一郎、中別府雄作、林慎一、樋野興夫、藤木博太、湯浅保仁、吉川裕之の11名から委任状が提出された。定足数は幹事25名の3分の2で17名、委任状11名とあわせて21名となり幹事会は成立。事務局として若井建志、内藤真理子(名古屋大学)が同席した。

I. 平成20年度活動報告

1. 研究会活動報告

(1) 第9回学術集会：平成20年5月22-23日に福岡市の九州大学医学部百年講堂で中別府雄作会長のもとで開催された。

(2) ニュースレター：10月(Vol.9 No.1)と3月(Vol.9 No.2)の2回発行された。

(3) ホームページ：菊地幹事の

もとで、適宜更新された(最終更新日2009年5月19日)。

(4) 会員数：平成20年度の新入会は7名、退会は9名であった。休会中1名を除く平成21年3月31日現在の会員は合計152名(1法人会員を含む)であった。なお、4月1日以後の新入会は5名、退会は0名であることが報告された。

2. 平成20年度会計報告

平成20年度の会計報告(古野、清水両監事による監査済み)が行われ、決算報告が承認された。

3. 平成21年度予算案

事務局より平成21年度予算案が提示され、原案どおり承認された。

II. 役員の選出

幹事(任期3年)：今井、北川、菊地、酒井、笹月、渋谷、清水、梶村、園田、高橋、田島、津金、中地、中別府、中村、浜島、藤木、三木、森、湯浅、吉川の21人の幹事が任期満了となり、辞退の連絡があった藤木幹事を除く20人が再任された。なお、再任にあたっては本人の意志を確認することとなり、再任について回答がない場合には再任しないことになった。また、新幹事として林奉権先生が推薦され、承認された。

監事(任期の規定なし)：清水幹事、古野幹事の継続が承認された。

編集担当幹事(2年毎に交代)：津金幹事(継続)、酒井幹事(新規)が承認された。

※再任者：今井、菊地、酒井、清水、梶村、田島、津金、中地、中別府、中村、浜島、三木、森、湯浅、吉川

※辞退者：北川、笹月、渋谷、園田、高橋

平成21年度幹事20名：今井浩三、菊地正悟、古野純典、酒井敏行、清水憲二、末岡榮三朗、梶村春彦、田島和雄、津金昌一郎、中地敬、中別府雄作、中村祐輔、浜島信之、林慎一、林奉権、樋野興夫、三木義男、森満、湯浅保仁、吉川裕之

III. 平成21年度の活動方針

1. 次期学術集会について

森満次期学術委員長(札幌医科大学)より、平成22年度(第11回)学術集会の日程が説明された。

期日：平成22年7月15日(木)、16日(金)

場所：北海道大学学術交流会館(札幌)

次期学術集会も本年度同様に2研究会1学会の合同学術集会で行われる。第33回日本がん疫学研究会は森満会長、第17回日本がん予防学会は北海道大学の浅香正博先生のもとに行われることが決定している。

2. 次々期学術委員長の選出

次々期(平成23年度)学術委員長選出については、日本がん疫学研究会との合併について協議中であるため保留とした。

3. ニュースレターおよびホームページの方針

ニュースレターおよびホームページについてはこれまでと同様とすることが承認された。

4. 日本がん疫学研究会との合併について

1) 日本がん疫学研究会との合併について協議の経緯について以下のような説明があった。昨年度の幹事会で連携協議会の設置が承認され(委員は、

北川、中地、湯浅、梶村、浜島の幹事5名)、日本がん疫学研究会の連携協議会委員(委員は秋葉、田島、大島、菊地、田中)との間で個別に情報交換を行った。

- 2) 両研究会で個別に合併についての会員アンケートを実施し、日本がん分子疫学研究会は20人の回答者中賛成が19人反対が1人、日本がん疫学研究会

は7人の回答者中全員が賛成という結果を得た。

- 3) 平成21年5月15日に両研究会の委員が出席し、連携協議会が開催された。アンケートの結果に基づき、合併を前提に新研究会の規約の内容およびその手順が議論された。新研究会の名称については、広く会員の意見を聞くことが必要との合意が得られた。

上記の経緯から、本幹事会としては合併に向けて手続きを進めることが承認された。また、総会後に予定されている両研究会合同の説明の内容について了解が得られた。今後、新研究会の名前について会員から意見を聞き、規約の詳細について検討を続け、合意が形成されれば来年度の両研究会総会で合併の承認を得ることになった。

2009 年度年会費納入のお願い

2009 年度(2009 年度以前の年会費が未納の方には 2009 年度+未納年度分)の年会費振込用紙を郵送いたします。ニュースレターを郵送希望の会員の皆様方にはこのニュースレターとともに、ニュースレターを E-mail に添付してお送りします会員の皆様には年会費振込用紙のみ郵送させていただきます。

なお、所属、ご住所、お電話番号など、変更がありましたら、メール(jscme@med.nagoya-u.ac.jp)か、FAX にてご連絡下さいますようお願い申し上げます。

日本がん分子疫学研究会事務局
〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町 65
名古屋大学大学院医学系研究科予防医学/医学推計・判断学内
電話 052-744-2132 FAX 052-744-2971
E-mail: jscme@med.nagoya-u.ac.jp

編集後記

遅ればせながら、2009 年度ニュースレターの第 1 号、即ち、Vol. 10, No. 1 を、発刊することが出来ました。前号に引き続き、私が編集を担当させて頂いた関係もあり、あまり変わり映えない内容となってしまいました。まず、「がん予防大会 2009 愛知」として、第 32 回日本がん疫学研究会と第 16 回日本がん予防学会との共催で開催されました、第 10 回日本がん分子疫学研究会の報告を、会長の菊地先生にして頂きました。「予防の容易ながん」については、一刻も早い予防対策の具体的実施が、また、「予防の困難ながん」については、尚一層の予防のための研究が求められます。次に、参加者からの報告として、今やがん分子疫学研究の第一人者である愛知がんセンターの松尾先生にご寄稿頂きました。遺伝-環境相互作用の研究において、疫学研究の果たす役割の重要性を改めて認識させられました。そして、日本がん分子疫学会にとっては、最大の懸案事項である日本がん疫学研究会との合併協議の経緯についての報告を浜島会長にお願いしました。がん予防大会の開催期間中に、両研究会の会員への合同説明会も開催されましたが、合併に向けての具体的に解決すべき問題が提示されました。難しい点もありますが、多くは解決可能ではないかと個人的には感想を持ちました。会員の皆様からの忌憚のない意見が求められていますので、皆様、是非、事務局または浜島会長宛てにお寄せください。

(津金昌一郎)